



企画展『近代日本 船のあゆみ～多種多様な船とその役割～』および関連事業（ワークショップ、市民セミナー）

野村, 昌孝
菊地, 真

(Citation)

海事博物館研究年報, 51:3-10

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100490220>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100490220>



企画展『近代日本 船のあゆみ～多種多様な船とその役割～』 および関連事業（ワークショップ、市民セミナー）

館 長 野 村 昌 孝
副館長 菊 地 真

昨年度、『ありがとう深江丸』と題して本学の練習船を特集し、その前年度は前身校時代の練習船「進徳丸」を特集するなど、このところ大学関係の企画展示が続いてきた。これまでの新型コロナウイルス（COVID-19）の影響が社会的に一息ついてきた中、2023（令和5）年度は前年度に増して、通常通りの博物館運営ができるものと期待された。

一方で、海事博物館では近年、戦後の商船に関する船舶模型や進水式記念品などの寄贈をいくつか受け、近現代の海運の資料が増加してきた。コンテナ輸送の導入がひとつの契機となった海上輸送の変化は港湾労働のあり方を大きく変え、商船は原油・木材チップ・鉱石・自動車・一般貨物コンテナなど、運搬する貨物の種類ごとに特化し、専用船化してきている。現代の多種多様な船とその役割を今回は紹介したいというのが第一の発端である。

また、私たちが遠隔地に移動する際は航空機や鉄道を用い、インターネットで買い物をした荷物は自動車の配送トラックで自宅まで届けられる時代となったが、海上輸送、ことに世界各国と日本を結ぶ国際貿易においては、衣食住を支える各種原材料（小麦、綿花、石炭、石油ガスなど）を思い浮かべれば分かるように、船舶による大量輸送が無ければ成しえない。輸出入貨物の99.5%を担っているのが外航海運である。

海運は海という、世界に通じる無限の道を利用した日本の基幹産業である。そこで、日本の海運で活躍するさまざまな商船に焦点を当て、近代以降に発展してきた歩みを踏まえながら、当館所蔵の船舶模型などにより広く紹介する目的で本企画展を開催した。

以下、展示解説に基づいて各展示コーナーの内容を述べる。なお現代の船舶資料写真ほかを快く提供頂いた各船会社等の関係各位、および花毛布の展示にご協力頂いた上杉恵美教授（明海大学）に御礼申し上げます。



企画展開幕式



企画展示風景



企画展ポスター

I. 企画展の概要

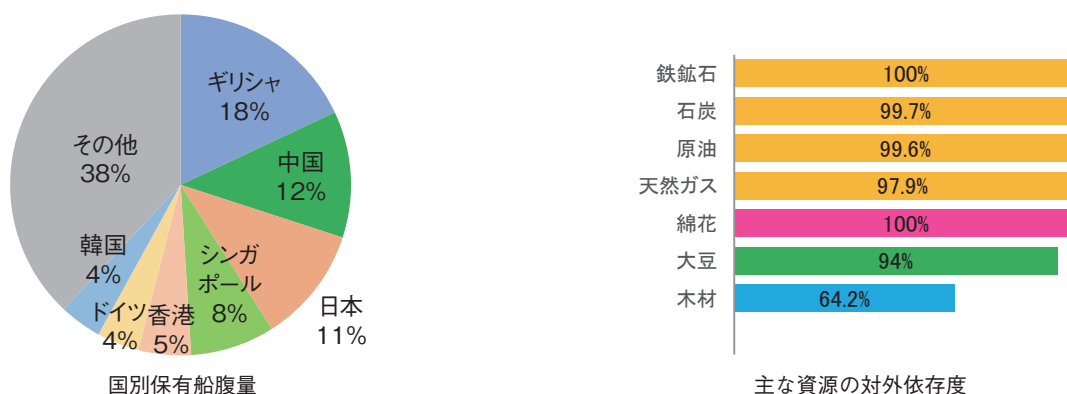
1. 日本の海運の現況

(世界を結ぶ外航海運)

商船が世界の海を渡り、他国間同士で海上輸送を担うのが外航海運で、世界経済に不可欠な産業である。近年海上輸送量は右肩上がりで増加し、船の輸送力（船腹量）も増大している。日本の商船隊は、1位のギリシャ、2位の中国に次ぐ第3位で、世界の船腹量の11%を占めている。

四方を海に囲まれた日本を世界とつなげているのは商船による海運のネットワークである。日本の産業構造や私たち国民のニーズの多様化と変化にともなって船の運航形態も大きく変化してきた。けれども海上輸送によって私たちの生活が支えられてる事実には変わりはない。

衣食住のもととなる原材料の輸入割合は、鉄鉱石や原油、天然ガス、天然ゴムなどはほぼ100%である。羊毛や綿花も同じく100%、飼料のトウモロコシや食料のエビ、大豆、小麦などもほぼ100%となっており、日本が多くの原材料を輸入し、加工した製品を輸出する加工貿易で成り立っていることがわかる。



出典：UNCTD「REVIEW OF MARITIME TRANSPORT」、令和2年度「食糧需給表」

令和2年「木材需給表」「エネルギー白書2022」「鉄鋼統計用要覧」2021年版、「森林・林業白書」令和3年度版
帝国書院HP統計資料、「日本のアパレル市場と輸入品概況2022」、財務省貿易統計

(国内輸送を支える内航海運)

国内で貨物を運ぶ方法の主力は自動車と船舶で、最近では自動車が55.3%、内航海運が39.8%の割合である。これは島国である日本で、古くから船が国内輸送で使われてきたことを反映している。なかでも石油製品、セメント、鉄鋼といった各種産業で用いられる物資はその8割以上を船が輸送している。大量・長距離輸送の担い手として見れば、船はこれに勝るものはない重要な輸送手段である。

2. 日本の船のあゆみ

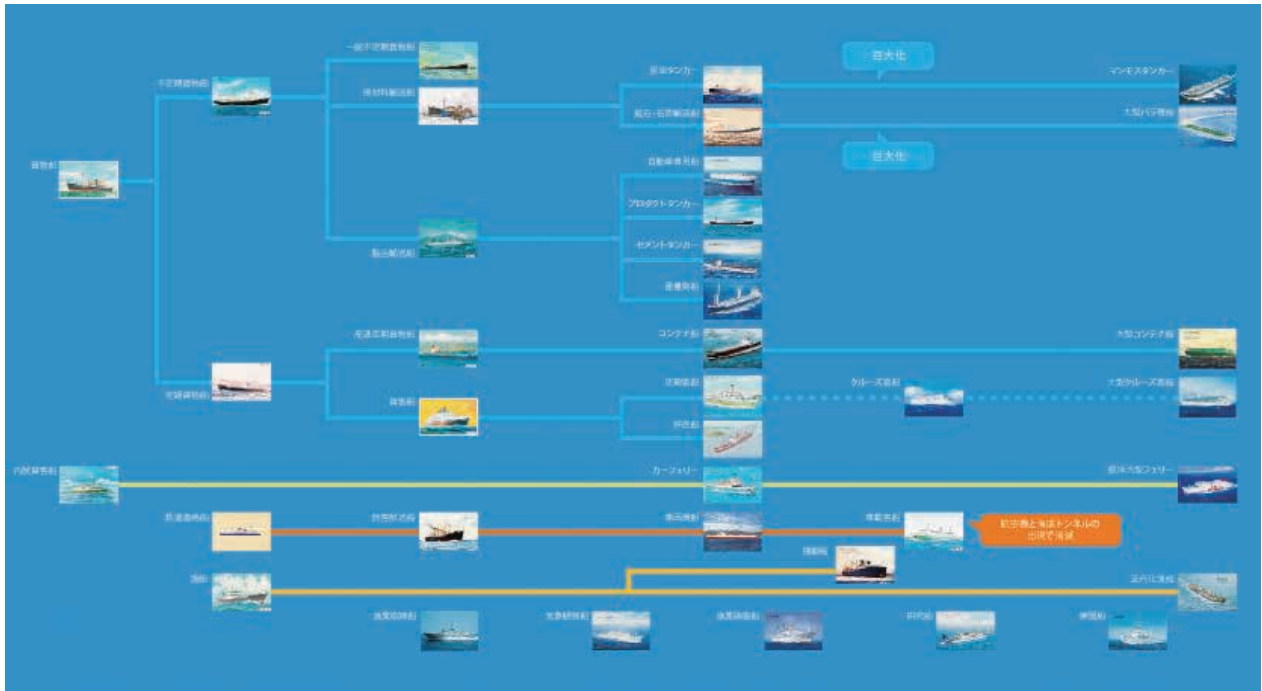
近代以降の日本の船の発達を系統樹としてあらわしてみると、次第に枝分かれをして、貨物輸送、漁業、海洋の調査など、目的に応じた機能を持つさまざまなタイプの船が建造されてきたことが明瞭である。

戦後、日本の経済発展にともなって海上輸送量が急増したため、船舶の大型化や高速化に加えて貨物の特化による専用船化が急速に進展した。例えばコンテナ船で見ると、はじめは2,000～3,000個（TEU）積みであったのが、2005年に1万個、今では2万個以上積める大型船が登場している。

(※TEUとは20フィートコンテナ（2.3×5.8m）で換算したコンテナ個数を表す単位)

さらに原油価格の高騰などから、輸送コストを抑えるために効率化と自動化や省力化が図られ、船の運航形態も大きく変化してきた。かつてのように、何もかもをひとつの船で運んでいた時代から、時々刻々

と変化する国際物流や経済情勢の下、貨物の種類や様態に応じて効率的、経済的かつ安全確実に運ぶことを可能にするよう図られてきた。



船の変化の系統樹

3. さまざまな船

海上輸送の目的に応じて登場してきたさまざまな専用船を模型や写真で紹介している。日本の商船の種類は多い順に、ばら積み船、自動車専用船、コンテナ船、一般貨物船、その他の船となっている。今回は多くの船会社等にご協力を頂き、現在活躍している商船のほか、計画中の未来の船舶についても多数の写真パネルを用いて展示を行った。



企画展風景

4. 船にまつわる品々

(さまざまな記念品)

船は一度に大量の物資を運ぶために人類が造り上げた最大級の道具である。進水式で用いる斧や記念絵葉書は船の誕生や完成という節目を祝うものとして作られた。

また船内では様々な活動が行われている。旅行する人を日本国内や世界へと運ぶ客船では旅行者への手

厚いサービスが重視され、港や船内では土産物が販売され、船室では乗船した人たちを花毛布などで出迎え、さらには船内新聞・メニューカード・切符・記念写真などの品々が彩った。



企画展示風景

（生活の場としての船）

運航を担う船員にとって船は衣食住を伴う生活の場である。大型船舶などでは、船長、機関長、航海士、機関士をはじめ何十名もの船員が働いており、国家資格である海技資格を得て海技士免許を持った船舶職員と部員で構成されている。

船員は任用されると船員手帳を保持する。船員手帳は労働者としての船員の雇用契約を証明し、彼らの権利を保護すると共に、船舶の安全な運航を人的に担保する目的を果たしている。神戸大学海洋政策科学部の乗船実習科では海技免許を取得でき、三級海技士（航海）・三級海技士（機関）の養成を行ってゐる。



Ⅱ．関連事業について

1. ワークショップ

今回、はじめての試みとして、子供向けの夏休みワークショップを企画した。船員の仕事は一般に広く知られているとはいいがたい。船への興味や関心を持ってもらう意味で、船に必要な技術であるロープワーク、そして客船でおもに見られる毛布やタオルを花や動物などの形に折り上げて乗客等へのもてなしの気持ちを表現する花毛布・タオルアニマルの2種類をワークショップで取り上げることにした。

ワークショップは今回が初めてであり、7月上旬から周知に努めたものの周知期間が短かったため、特にロープワークについては事前申し込みが少なかった。広報の方法について改善の余地があると考えられる。ワークショップ当日は予想以上に盛り上がりを見せたが、運営面で戸惑うところもあり、準備や当日の流れなど再検討すべき点があった。

「船のしごと～どうむすぶ？ロープワーク～」

ロープワークのワークショップは帆船時代から船員に欠かせない技として代々受けつがれ、陸上でも荷造りなどで欠かせないロープの結び方を紹介することを目的にした。2023年7月26日（水）および28日（金）の2日間、午後に2回ずつ実施し、小・中学生を対象に事前申込制で、空きがあれば当日も随時受け付けた。講師は当館の矢野（顧問）とボランティア数名が担当した。

初日は家族連れ4名で、2日目は団体で訪れた小学生ほか12名が受講した。ロープの結び方は複雑にも見えるが、どの結びかたも実際にはさほど難しくなく、強く結束され、また、ほどき易い不思議な特性がある。子供たちは短時間だが熱中してロープと格闘していた。



ワークショップ風景（ロープワーク）

「船のおもてなし～花毛布とタオルアニマルをつくろう～」

2つ目のワークショップは8月4日（金）午後に開催した。戦前に客船の客室サービスの一つとして誕生し、日本独特の「おもてなしの文化」として華開いたのが花毛布である。花毛布は寝具の毛布を折り畳んで形作るもので、折り紙との共通点が多く、外国の客船に同様のサービスは認められない。その代わり、海外ではテーブルマナーのナプキンに由来すると推測されるタオルアニマルというサービスがある。タオルアニマルはタオルやバスタオルを折り畳んで動物などを形作るもので、互いに起源は異なるものの、同じような船内サービスとして注目される。

タオルアニマルは海外のクルーズ船やホテルでしばしば行われているが、花毛布は現在では数隻でしか見ることが出来なくなっている。特に花毛布という客船特有の無形文化を知って頂くと同時に、より手軽に作りやすいタオルアニマルを組み合わせ、船のもてなしに親しんでもらえるよう企図した。

講師として上杉恵美教授（明海大学）をお招きし、実際に船舶業務として携わってきた吉田孝志氏（元国鉄青函連絡船事務部乗組員）と中村鎮生氏（元海事教育機構練習船司厨長）に花毛布作製の実演をお願いした。参加者は最大20名までで設定したが、幸い順調に申し込みを頂き、当日は小学生と保護者11組の16名であった。

はじめに上杉先生から花毛布やタオルアニマルについて、作製されるようになった歴史的経緯やデザイ

A white stuffed elephant toy is lying on its side on a white surface. The elephant has a long trunk, small ears, and a small yellow nose. It appears to be a simple, soft toy.

神戸大学海事博物館

夏休みワークショップ

船のおもてなし

はなもふ たおりぬま

～花毛布とタオルアニマルをつくろう～



船には船員さんたちが考えだした、「花毛布」と「タオルアニマル」というユニークな布があります。「花毛布」は日本の船に100年まえから伝わる技で、毛布で花や自然の風景などを作って客室に飾ります。海外のクルーズ船では、タオルを使って作った動物たちがお客様を楽しませていました。みなさんも毛布やタオルで、折紙のような形づくりをしてみませんか。

日 時	2023年8月4日(金)	14時〜15時（受付は当日13時40分まで。）
場 所	神戸大学海事博物館	お申し込みの方は、公共交通機関をご利用ください。
対 象	小学生とその保護者 10組	※お申し込みより、保護者の方から申し込みは受け付けません。
		定員限りによりキャンセル、参加者以外の方観覧のイベント見学は可能です。

参加費 無料
持参物 材料（タオルアニマル）を持ち帰る数、筆・画用紙
場 所 上村 恵美氏（昭和女学芸院）、中井 佳代氏（文部省教育情報発信施設総務課）
司 会 菊地 真（神戸大学文学研究科・海事情報連携部長）

申込み 6月は毎月1回から7月21日(金)17:00まで、インターネットでの申し込みです。Eメール通知・FAXによる申込みでもできます。申込み多数の場合は抽選となります。7月24日(月)16時に結果をご案内いたします。【Email:info.kobe-u.ac.jp】からメールアドレスを送り付けてください。申込み締め切りは、8月2日(木)までに必ずご連絡ください。

※申し込みに限ります。お申し込みされた後、保護者以外はお断りできません。
なおお急ぎ、あるいは「神戸大学海事博物館」ホームページから、お申し込みページへとお渡すください。オンラインネットでお申込みできない場合、お問い合わせください。
個人情報は、イベント運営以後は廃棄します。

問い合わせ先 神戸大学海事博物館 企画課 電話：078-831-3554（休・夜）078-831-3550 携帯：090-5027-0944 FAX:078-831-3554 Eメール:kaiwa@kaiwa.kobe-u.ac.jp (メールに送ってください)

主催 神戸大学海事博物館 共催 兵庫県立美術館 協賛 神戸市文化芸術センター 後援 神戸市文化芸術センター 協力 兵庫県立美術館 神戸市文化芸術センター 神戸市文化芸術センター 神戸市文化芸術センター

— 9 —

・実施概要

- 11：30～12：40 海事博物館企画展見学
- 13：00～14：30 講演1「在来貨物船から大型船用船へ」
安達 直（株式会社商船三井 元船長）
- 14：45～16：15 講演2「海上コンテナ輸送の現状」
井本隆之（井本商運株式会社 代表取締役社長）

これまでに開催した海事博物館市民セミナー（大学院海事科学研究科公開講座）は次のとおり。

- 2007年度（第1回）「高田屋嘉兵衛と北前船」
- 2008年度（第2回）「神戸と近代日本商船隊」
- 2009年度（第3回）「博物館資料と戦時徴用船」
- 2010年度（第4回）「海路図や絵巻から見る江戸時代の海路の賑わい」
- 2011年度（第5回）「大航海時代から人工衛星まで-航海術と計器の発展-」
- 2012年度（第6回）「船の推力発展史-人力・風力から未来へ-」
- 2013年度（第7回）「進水絵葉書に見る船の変遷-船舶の過去から現在-」
- 2014年度は開講せず（企画展「船舶模型から学ぶ人・海・船-海運の過去・現在・未来-」）
- 2015年度（第8回）「大戦中の日本商船 船員の姿」
- 2016年度（第9回）「神戸における海技者教育100年の歩み（前編）」
- 2017年度（第10回）「神戸における海技者教育100年の歩み（後編）」
- 2018年度は開講せず（日本遺産追加認定記念トピックス天展「和船の活躍した時代」）
- 2019年度（第11回）「和船の活躍した時代」
- 2020年度はCOVID-19のため開講せず（小企画展「戦後75年太平洋戦争と船員」「和船の活躍した時代」）
- 2021年度はCOVID-19のため開講せず（企画展「ふね遺産進徳丸」）
- 2022年度（第12回）「ありがとう進徳丸・深江丸」



安達 直講師



井本 隆之講師